

NPhA

隔月刊誌
[エヌファ]

Round Table Discussion

特別座談会

薬局が担う口腔ケアと多職種連携

健康寿命延伸に向け 望まれる口腔機能維持の支援

東京理科大学薬学部薬局管理学教授／
有限会社グッドファーマシー（栃木県）
代表取締役

鹿村 恵明 氏

慶應義塾大学薬学部社会薬学部門教授・
附属薬局長

山浦 克典 氏

株式会社わかば（神奈川県）
学術部ジェネラルマネージャー

原 和夫 氏



Investigation

NPhA 薬局機能創造委員会

「一般用医薬品等の取扱いに係る調査報告書」公表

48薬効群の半数以上で ニーズの乏しい実態明らかに

Visiting

【訪問シリーズ】認知症介護者家族会

薬局だからできる

医療・介護・福祉につなぐ運営

株式会社クリエイトエス・ディー

クリエイト薬局八王子堀之内店（東京都）

Scientific Meeting of PSJ

第19回 日本薬局学会学術総会

11月1・2日、札幌コンベンションセンターを

メイン会場にハイブリット開催

医療DXの本質・課題について議論

4 Round Table Discussion

特別座談会

薬局が担う口腔ケアと多職種連携 健康寿命延伸に向け 望まれる口腔機能維持の支援

東京理科大学薬学部薬局管理学教授／
有限会社グッドファーマシー（栃木県）
代表取締役

鹿村 恵明氏

慶應義塾大学薬学部社会薬学部門教授・
附属薬局長

山浦 克典氏

株式会社わかば（神奈川県）
学術部 ジェネラルマネージャー

原 和夫氏

10 Investigation

NPhA薬局機能創造委員会「一般用医薬品等の取扱いに係る調査報告書」公表 48薬効群の半数以上でニーズの乏しい実態明らかに

15 Hospital Tour

NPhA次世代委員会 豊田地域医療センター（愛知県）見学会を開催
総合診療を基軸に「地域中心」の医療を提供

16 Scientific Meeting of PSJ

第19回 日本薬局学会学術総会 11月1・2日、札幌コンベンションセンターをメイン会場にハイブリット開催
医療DXの本質・課題について議論

18 Visiting

訪問シリーズ「認知症介護者家族会」

薬局だからできる医療・介護・福祉につなぐ運営

株式会社クリエイトエス・ディー クリエイト薬局八王子堀之内店（東京都）薬局長 原 智子氏（認知症研修認定薬剤師）

21 Local Circumstances

NPhA都道府県担当者に聞く地域事情「沖縄県」

株式会社薬正堂（すこやか薬局）保険調剤本部 薬局運営推進部部長 坂本 政文氏

22 Workshop

NPhAワークショップ 開催レポート

24 Beyond The Sea

米国＆英国からのレポート「緊急経口避妊薬の供給体制」

アメリカ 誰でも入手可能なOTC薬、薬剤師の介入機会消失 大野 真理子氏

イギリス 薬局での全面無料提供が2025年10月スタート 國分 麻衣子氏

28 At The Top

地域のトップランナー 株式会社アシスト（千葉県）

30 Diary

薬局管理栄養士ダイアリー

株式会社ストーン・フィールド（大阪府）ヘルスケア事業部 広報チームリーダー 管理栄養士 竹内 菜々美氏

32 Partnership

薬剤師との連携を目指して

株式会社サンキュードラッグ（福岡県）薬局業務推進課 篠原 初恵氏

33 NPhA新会員紹介

34 編集後記



協会ロゴマークの由来

協会ロゴマークは、私たちの仕事である調剤業務に古くより使用されている重要な器具・薬匙（スパーテル）を基本にあらわし、さらに日本保険薬局協会の英名 Nippon Pharmacy Association の略である NPhA を薬匙の上に広げて重ね、空を翔ける鳥のようにイメージしました。今後、日本保険薬局協会が大きく羽ばたき成長するよう、希望を込めて作成されています。

好評連載



薬局が担う 口腔ケアと多職種連携

健康寿命延伸に向け 望まれる口腔機能維持の支援

基本的な口腔ケアの情報周知と 物販環境の整備が重要

近年、健康寿命の延伸に向けて「口腔機能」の維持が注目され、オーラルフレイル予防を含め口腔ケアにおいて薬局・薬剤師の役割の重要性が高まっています。そこで口腔ケアについて多職種連携や在宅医療を先駆的に進める実務、教育・学術の立場から、薬局での口腔ケア推進の意義や役割、薬剤師研修や薬学教育での

取り組み状況、歯科医師を含む多職種連携の展望についてお話しいただきました。

このなかで薬局・薬剤師が薬の副作用の観点を含め口腔ケアに積極的に関与し、必要に応じて受診勧奨をするなど、歯科医師との連携を進めることの重要性が指摘されました。

出席者 (発言順)

東京理科大学薬学部薬局管理学教授／
有限会社グッドファーマシー（栃木県）
代表取締役

鹿村 恵明氏

Yoshiaki Shikamura

慶應義塾大学薬学部社会薬学部門教授・
附属薬局長

山浦 克典氏

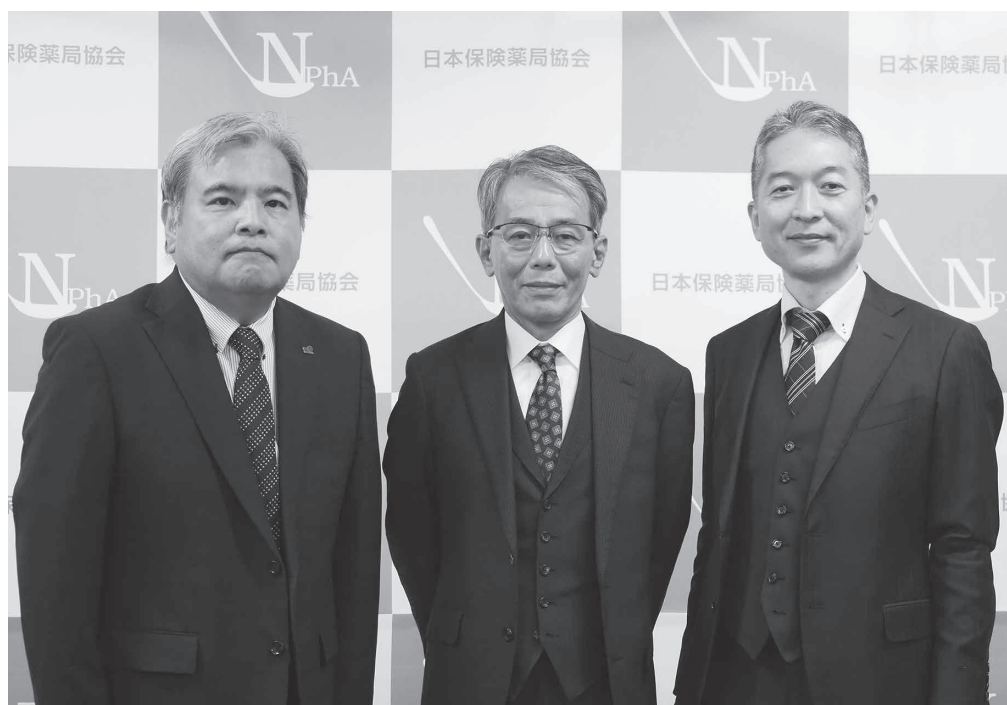
Katsunori Yamaura

株式会社わかば（神奈川県）
学術部ジェネラルマネージャー

原 和夫氏

Kazuo Hara

左から原、鹿村、山浦の3氏



口腔内トラブルや副作用に 多くの医薬品が関与

——初めに口腔ケアやオーラルフレイル予防に取り込む必要性と、薬局・薬剤師の現状についてお聞かせください。

鹿村 これまでも薬局では、口腔ケア商品は供給していましたが、オーラルフレイル予防などはあまり意識せずに販売してきたと思います。私が子供の頃は、高齢者の多くが入歯などで、自分の歯でしっかり食べられない人が多かったと思います。しかし、平成とともに「8020運動」が始まり、自分の歯が残る確率が高まり、寿命も伸びたのではないかと考えています。



鹿村 恵明氏

さて、薬局ができる口腔ケア支援の中心は虫歯予防です。特に小児の虫歯予防や歯科検診の啓発は重要ですが、痛くないとなかなか受診しませんので早めの受診勧奨が大切です。また、オーラルフレイルでは誤嚥性肺炎を予防することがとても大切です。口腔機能が衰えると食事も取れず、最終的にフレイルになります。薬局では最近、管理栄養士を雇うところもあり、口腔ケアと栄養管理とを関連づけたトータル支援ができると思います。

原 医療従事者のなかで、健康に関して自由にファーストアクセスができるのは薬剤師・薬局だけだと思います。私は、日本保険薬局協会（NPhA）の健康サポート薬局事業に関わってきましたが、地域包括ケアシステムにおいて当初、薬局の役割も明確ではなく、口腔ケアにもあまり介入してこなかったと認識してい

ます。今後、NPhAの事業の中で、口腔ケアについても薬剤師の職能として根付かせるようにする必要がありますと思います。

山浦 医療用医薬品の多くに口腔内の副作用を起こす成分が含まれます。口腔乾燥症、歯肉増殖症、顎骨壊死、嚥下機能低下・障害や口腔カンジダ症、味覚障害、口腔粘膜炎などが代表的な副作用で、口腔乾燥症であれば500以上の医薬品成分が該当します。医療用医薬品は1,700成分ほどですので、全体の3分の1ぐらいに相当します。例えば口腔乾燥症の原因薬剤には抗ヒスタミン薬や抗精神病薬の他、カルシウム拮抗薬などもあります。

私たちが歯科診療所の先生方に調査した結果では、薬剤性の口腔内副作用を診察した経験があるという先生が9割を超えていました。その副作用の1位は口腔乾燥症、2位が歯肉増殖症で、特に口腔乾燥症は7割を超える歯科医師が経験していました。また、別の調査では高齢者の8割以上が口腔乾燥症の副作用を有する医薬品を処方されていました。このようにわれわれ薬剤師が提供する医薬品の多くが、口腔内に副作用を引き起す可能性があります。副作用の番人である薬剤師が、口腔内の副作用、トラブルに注目すべき時代が来ています。

日本口腔ケア学会が 薬剤師の関与を求める大阪宣言を公表

——研修体制や薬学教育での取り組みをお聞かせください。

山浦 口腔ケアに関する学会としては日本口腔ケア学会があります。所属する職種として一番多いのは歯科医師ですが、歯科衛生士や医師、看護師、薬剤師、介護福祉士、言語聴覚士と多様で、薬剤師は約200人所属しています。2021年に薬剤師部会を設置し、私が部会長を務めています。

2022年に開かれた学術大会で「大阪宣言」を発表しました。その内容の多くが薬剤師に関わるもので、主に薬学教育における口腔ケア領域の充実と、現場の薬剤師の口腔ケアへの参画の重要性を訴えるものでした。また、この年、日本口腔ケア学会認定資格として「薬剤師5級」が開始され、1年後に4級の認定資格が運用され、両者を合わせた認定取得薬剤師は100人を

「一般用医薬品等の取扱いに係る調査報告書」公表

48薬効群の半数以上で
ニーズの乏しい実態明らかに一律備蓄から地域ニーズに合った
実効性の高い仕組みへの転換不可欠

日本保険薬局協会（NPhA）薬局機能創造委員会は、このほど、「一般用医薬品等の取扱いに係る調査報告書」を公表しました。

それによると、地域支援体制加算の届出薬局等に求められる「基本的な48薬効群」において、2025年7月の1カ月間で「販売実績あり」と答えた割合が30%を超えたのは、加算届出薬局全体でわずか3カテゴリー

に止まりました。これはドラッグストア併設薬局においても同様で、半数以上の分類においてニーズの乏しい実態が見られました。こうした結果から報告書は、実効性の乏しい48薬効群の一律備蓄から、地域医療のニーズや、薬剤師の専門的な知見に基づき推奨する品目を備蓄する、より柔軟で実効性の高い仕組みへの転換を求めています。

3,380 薬局から回答

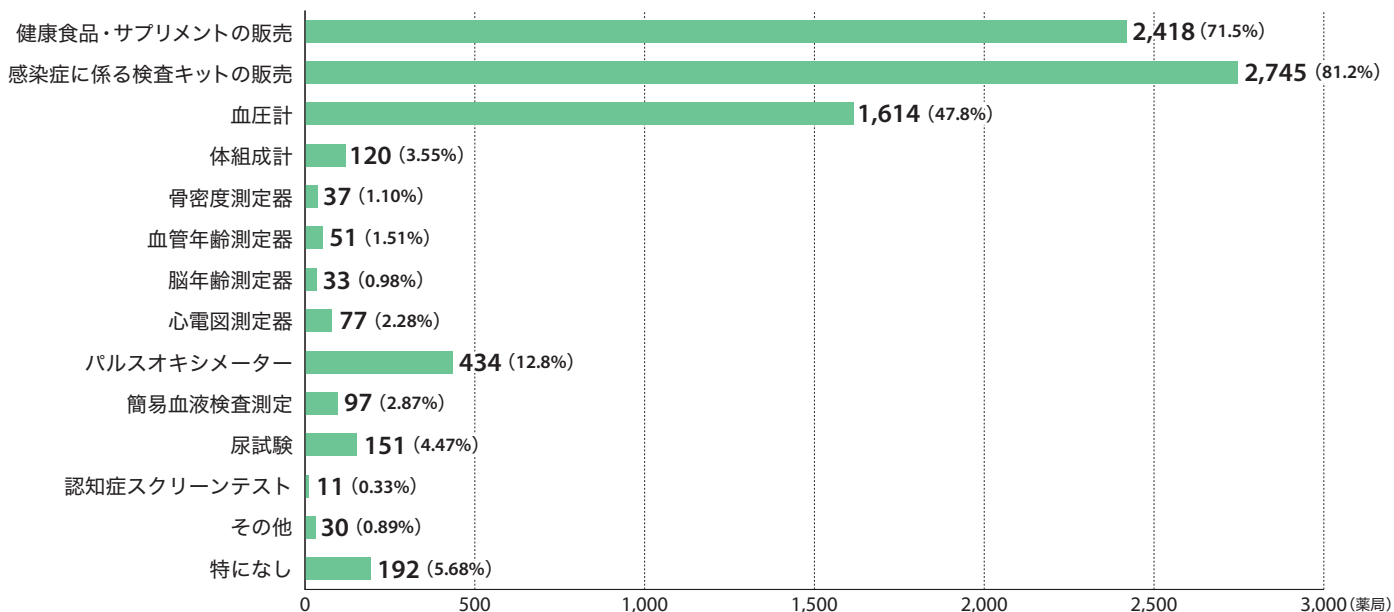
調査の目的は、一般用医薬品及び要指導医薬品の取り扱いや、相談応需・受診勧奨等の実態把握のため。調査は、保険調剤業務を取り扱う薬局として、1年以上運営している薬局の管理薬剤師を対象に、オンラインWEB方式で行

われました。調査期間は2025年8月14日から9月17日まで。1薬局1回答で、回答数は3,380薬局でした。

3,380薬局の一般用医薬品の販売体制を尋ねたところ、「対面販売」が3,301薬局（97.7%）、「電話・アプリ等による受注、受注店舗からの配送販売（特定販売に該当）」92薬局（2.72%）、「所属する薬局グループが運営するECサ

グラフ1 一般用医薬品販売以外のセルフメディケーション支援に係る体制

〈問〉一般用医薬品販売以外のセルフメディケーション支援に係る体制として、常時設置、もしくは導入しているサービスとして当てはまるものをすべて選択してください。（複数回答可）（N=3,380 薬局）



イト等を案内（特定販売に該当）」108薬局（3.20%）、「該当なし」72薬局（2.13%）でした。

セルフメディケーション支援体制

81%が感染症検査キット販売、47%が血圧計を設置

「一般用医薬品販売以外のセルフメディケーション支援に係る体制」を訊きました。最も多かったのは「感染症に係る検査キットの販売」で2,745薬局（81.2%）でした。次いで、「健康食品・サプリメントの販売」2,418薬局（71.5%）、「血圧計」1,614薬局（47.8%）、「パルスオキシメーター」434薬局（12.8%）、「尿試験」151薬局（4.47%）、「体組成計」120薬局（3.55%）と続きました（**グラフ1**）。

一般用・要指導薬の取扱品目数

平均は73.9品目、不動在庫は22.1品目

一般用医薬品及び要指導医薬品の取扱品目数を訊きました。その結果、3,380薬局の平均取扱品目数は73.9品目、そのうち要指導医薬品と第一類医薬品は平均8.79品目（N=2,704薬局）でした。

最も回答数の多かったのは「51～60品目以下」で896

薬局（26.5%）、次いで「41～50品目以下」742薬局（22.0%）、「61～70品目以下」325薬局（9.62%）が続きました。「301品目以上」が133薬局（3.94%）あった一方、「10品目以下」が276薬局（8.17%）ありました。

なお、1年以上も販売実績のないデッドストックになっている品目は平均22.1品目（2,271薬局）でした（**グラフ2**）。

地域支援体制加算・健サポ届出薬局の品目数

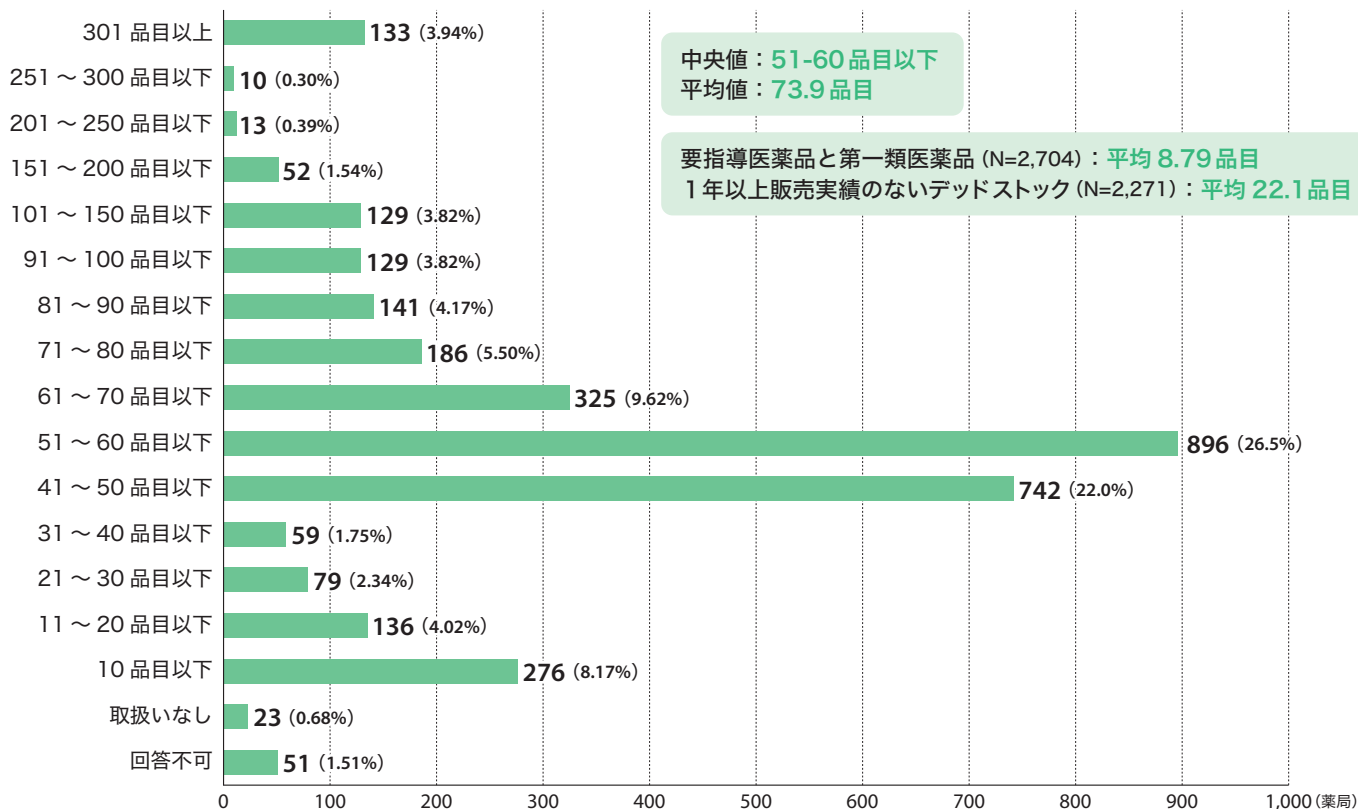
届出薬局は品目数・不動在庫が多い傾向

地域支援体制加算及び健康サポート薬局の届出の有無による取扱品目数の違いを調べました。地域支援体制加算及び健康サポート薬局の届出をしている薬局のほうが取扱品目は多かった一方、デッドストックの品目も多い傾向がありました。

地域支援体制加算の届出をしている薬局においては、「51～60品目以下」の薬局が最も多く33.2%（加算届出なしは12.2%）。次いで「41～50品目以下」が26.5%（加算届出なしは15.4%）、「61～70品目以下」11.5%（加算届出なしは5.6%）でした。また、加算届出をしている薬局のデッドストックは26.5品目、加算届出をしていない薬局は13.0品目でした。

グラフ2 一般用医薬品及び要指導医薬品の取扱い品目数

〈問〉一般用医薬品及び要指導医薬品の取扱品目数を教えてください。（N=3,380薬局）



▶ 平均値は、11-20品目以下ならば15品目などとし、回答不可を除き計算

薬局だからできる 医療・介護・福祉につなぐ運営

月1回、薬局の待合室で開催、
認知症地域支援推進員・介護福祉士等も参加

株式会社クリエイトエス・ディー
クリエイト薬局八王子堀之内店(東京都)

薬局長 **原 智子**氏(認知症研修認定薬剤師)



聞き手

日本保険薬局協会
専務理事

柳楽 晃洋氏

クリエイトエス・ディーは現在、関東・東海エリアで820店舗を超えるドラッグストア・薬局を展開しています。住宅街立地の店舗が多く、地域の患者・顧客に寄り添う店舗運営が強みです。

クリエイト薬局八王子堀之内店(東京都八王子市)が毎月1回開いている認知症介護者家族会も、地域に向けたアプローチの一環です。薬剤師だけでなく認知症地域支援推進員や介護福祉士等の専門職も参加することで、医療・介護・福祉に繋ぐ運営を続けています。

市内23家族会のうち薬局主催は唯一

——薬局の概要をお聞かせください。

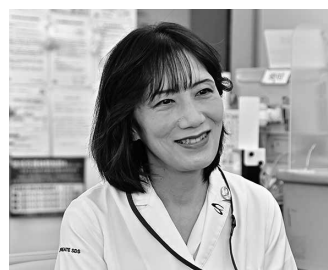
原 現在、人員は常勤薬剤師が4人と事務職が1人で、応需処方箋枚数は概ね月間800～1,000枚です。階上にある診療所が発熱外来を開設していますので、インフルエンザの流行する時期には多くなる傾向があります。備蓄医薬品数は1,300品目くらいです。

——毎月、認知症介護者家族会(以下「家族会」)を開いているとお聞きしています。少なくとも八王子市内で、薬局が家族会を開催しているのは、こちらだけのようなですね。どのような経緯で始められたのですか。

原 市内では23カ所で家族会が開かれていますが、当薬局の家族会以外は全て、地域包括支援センター(以下「地域包括」)が主催しています。そもそも家族会を開くようになったのは、私が2017年に認知症研修認定薬剤師の認定を受けたことに始まります。制度が

スタートして2期目です。その時、ある先輩薬剤師から「認知症カフェには医師や看護師が参加しているのに、薬剤師はほとんど参加していないので、ぜひ

行ってほしい」と促され、早速、市内の常設の認知症カフェに伺いました。確か3回目くらいに偶然、その地区の家族会の会長にお会いしまして、いろいろお話を伺うことができました。すると、「薬に対する不安を持っている介護者や、相談したいと思っている家族が多い」とのことで、「ぜひとも家族会に参加してください」と言われました。そこで翌月、当薬局がある地区の、地域包括が運営している家族会に参加してみました。すると、薬に関する質問を数多く受けました。「飲んでいない」に始まり「残薬がある」、「認知症の



原智子氏